

「現地を訪問して想うこと」

1973年 理工学部卒

山本 啓幸

今回、校友会の主催する東北応援ツアーが行われることを知り、阪神淡路大震災の被災者であり、復興工事に従事した土木技術者として、東北の被災地を訪問しなければならないとの思いを実行するために参加を申し込みました。この後、気仙沼市、南三陸町、石巻市、名取市閑上等の地域を訪問し、被災状況や復興の様子を見て来ました。以下に私の感じた事を述べます。

①東日本大震災と阪神淡路大震災

阪神淡路大震災は地方部での直下型地震で、建造物の崩壊と火災による被害が大きく、津波の被害はなく、地震の帯と言われる比較的狭い区域に集中していました。多くの建造物が倒壊している神戸、芦屋、西宮から10kmほどの近くの大阪では、日常生活が営まれている不思議な感じの光景がありました。したがって、公共インフラの復旧に集中的にかかる事が出来、又、個人の住宅についても境界や街区の状況も残しており、比較的早期に復興することが出来たと考えられます。翻って東日本大震災では、ほとんどが津波の被害で、リアス式海岸特有の入り江ごとの被災地が広範囲に分布し、中心部の大きな市や町は中枢部が壊滅的な被害にあっている状況で、当然行政の中枢被害も大きく、時間がかかるのもやむを得ないと感じました。

②土木技術者として思うこと

土木工学の使命は、治山、治水と言うように、国民の生命、財産を自然災害から守ること。社会資本を整備し、国民の生活、経済活動の利便性を向上させるものであります。しかし、今回、被災地を訪問し、人間の技術が、自然の前ではいかに小さいものであるか思い知らされた感じがします。土木工学の技術が飛躍的に進歩したのはコンピューターが発展した、この40年程度のことで、数百年単位で来襲する地震や津波に十分対応できるものではありません。建造物については、近年の地震の被害から耐震基準が定められ、ある程度の耐震設計をすることで対応できていると思いますが、津波については、今回の被害を考えて見ますと、土木技術で対応することが困難かと感じています。

被災地で、地元の人やガイドさんから、「津波てんでんこ」「命てんでんこ」「この石碑から下には住んではいけない」「釜石の奇蹟」「石巻大川小の悲劇」「三陸鉄道の上側は助かった」等の話を聞き、この中に今後の復興方法のヒントがあると思っています。多くの被災箇所によってさまざまな条件が異なっており、復興方法の合意も困難なものがあると思いますが、ソフト面を中心に復興がすみやかに実施できるように祈念しています。

③東北にエールを

阪神淡路大震災の被災経験者として、命が助かったことが最大の幸運でした。生きているからの苦しみであり、不安であります。多くの人々に助けられ、そして自らも土木技術者として復興に関わることができ、苦しいながらも充実した生活を送ることができました。この間、友人や近隣の皆様との交流が心のやすらぎや支えとなりました。

全国で「絆」という言葉が言われています。人は1人では生きてゆけないものです。必ず誰かが見てください。小さくは、家族や近隣の皆さんや、自治会、大きくは市町村レベル、立命館大学校友会もその一つです。全国の皆さんが、日本人としてこの「絆」を通じて、被災地が早く復興し、被災者の皆さんが立ち直れるよう応援をしています。被災された東北の皆さんには、生き残った者として後世にこの体験を伝えてくださるとともに、多くの困難を乗り越えて頂き、それぞれの復興を成就されることを祈っております。